

国指定史跡 骨寺村莊園遺跡

平成28年度調査概要



平成29年3月
一関市教育委員会

中尊寺と骨寺村

はじめに

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺経蔵の荘園であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』によって証明されています。平成17年には9つの区域が国史跡「骨寺村荘園遺跡」に指定されました。さらに、18年には「一関本寺の農村景観」として国の重要文化的景観に選定されています。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、23年6月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村荘園遺跡」については、24年度に世界遺産暫定一覧表に登載されており、当教育委員会は重点的に調査研究を行っています。

本年度は、25年度から継続している「梅木田遺跡」と「白山社及び駒形根神社」、27年度から継続している「平泉野遺跡」の発掘調査を実施したほか、「山王窟」の地形測量を実施しました。本書は、これらの調査成果をまとめたものであり、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

最後に、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力をいただきました。衷心より感謝を申し上げます。

平成29年3月

一関市教育委員会
教育長 小菅 正晴

例言

1. 本書は、平成28年度に一関市教育委員会(文化財課)が実施した骨寺村荘園遺跡に係る調査の概要報告書です。
2. 本書は、一関市教育委員会(文化財課)が執筆・編集しました。
3. 出土した遺物は、一関市教育委員会が保管しています。
4. 表紙は、白山社及び駒形根神社(若井原194-1地点)の縄文時代の住居跡の確認写真です。



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』(複製) 原典は中尊寺蔵

平安時代末期、自在房蓮光という僧侶は藤原清衡の命令により紺紙金銀字交書一切経を完成させました。その功績により中尊寺経蔵の別当(責任者)に命じられ、蓮光は自分の領地であった“骨寺村”を中尊寺経蔵に寄進(寄付)しました。こうして中尊寺領としての骨寺村が発します。

中尊寺には、鎌倉時代後期の『陸奥国骨寺村絵図』2枚が残されています。この絵図は当時の本寺地区を描いたもので、中世の農村景観を伝える大変貴重な史料です。

絵図は、中尊寺と奥州藤原氏に代わってこの地を支配した葛西氏との所領争いにおける、裁判の証拠書類と考えられています。左側の絵図は、家屋、田圃、川や道などが詳しく描かれており、“詳細絵図”と呼ばれています。それに対し右側の絵図は“簡略絵図”と呼ばれ、村を取り巻く山々がダイナミックに描かれています。

また、鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』にも「骨寺」が登場します。源氏と藤原氏との戦いであった奥州合戦が終わった後、中尊寺僧心蓮が源頼朝に対し寺の領地を保障(保障)してくださいとお願いに行きました。すると頼朝は、その場で骨寺(東は釜懸、西は山王窟、南は磐井川、北は峰山堂・馬坂)を寺領として認めました。この際に示された骨寺村の範囲が絵図に描かれ、さらに四至(村境)は現在も地名や遺跡として残されています。

梅木田遺跡の調査

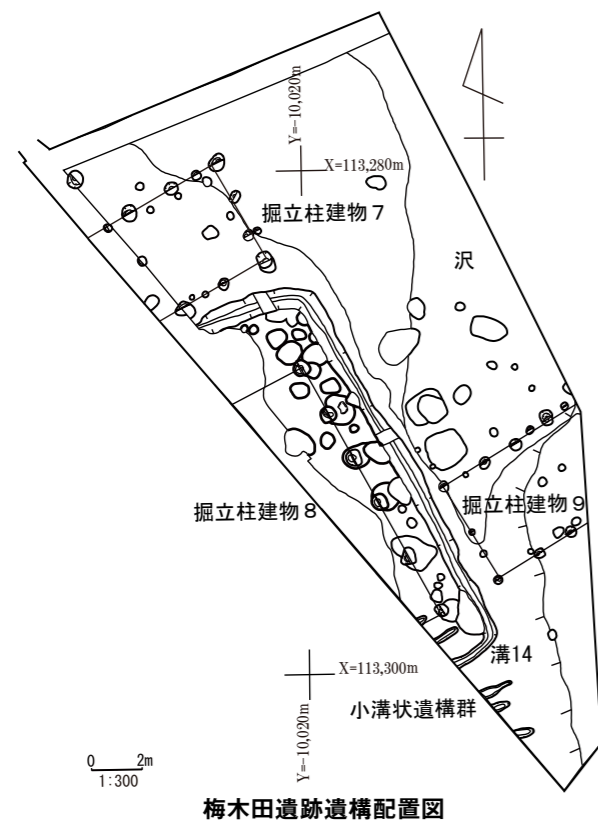
この調査地点は、平成25年度から継続して調査を実施しています。丘陵部の裾を切って造成された複数の平場があり、中央部平場、西部下段平場では、江戸時代の建物の変遷やそれともなう堀、溝や小溝状遺構群(畑の耕作痕)、さらには埋没した自然の沢の跡などを確認しました。

28年度は、東部平場を調査し、埋没した自然の沢、沢の埋没後に建てられた掘立柱建物3棟、溝と小溝状遺構群(畑の耕作痕)を確認しました。調査区中央部西側で確認した最大の掘立柱建物8は長軸*5間、短軸は調査区外に延びるため規模未詳で、その北・東・西辺を区画溝が囲みます。柱穴から遺物は出土していませんが、表土層から江戸時代(17~19世紀)の陶磁器片が出土しており、この時期の遺構群とみられます。

25年度から本年度まで、梅木田遺跡の全ての平場を調査した結果、西部下段平場、中央平場、東部平場で江戸時代の屋敷跡を確認しました。これは「ウメノキタ」(梅木田)と呼ばれる屋敷であったという地元の伝承を裏付けるものであり、『風土記御用書出』(安永四年(1775))に記載された屋敷名の一つ「一梅木田屋敷 壺軒」にあたる可能性があります。

25年度調査で出土した鎌倉時代の中国産青磁の時期の遺構は確認できませんでした。江戸時代に行われた土地造成で削平され、失われてしまった可能性が高いとみられます。

*間 柱と柱の間の数



梅木田遺跡遺構配置図



調査区遠景写真 山裾に複数の平場があります

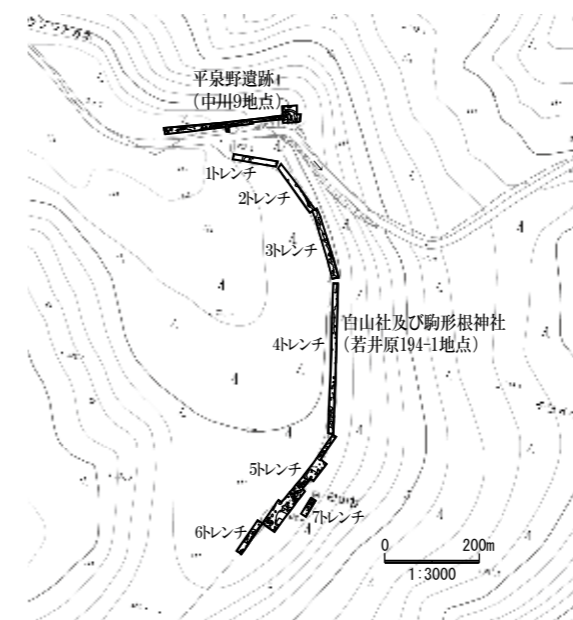


調査区全景写真

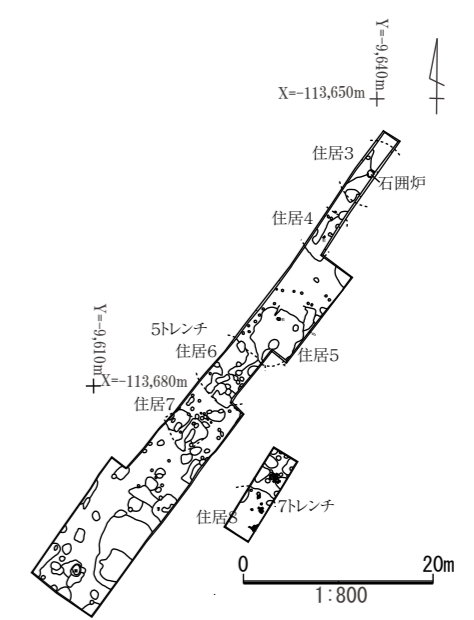
白山社及び駒形根神社(駒形5、若井原194-1地点)の調査

この地点は、「平泉野台地」の南東方向に張り出した最大の平場の東縁辺部にあたります。『陸奥国骨寺村絵図』には、丘陵の左(南)側に礎石らしき丸印の並びと「骨寺(堂)跡」「白山」の文字がみられます。その痕跡を確認するために発掘調査を実施しました。

現在の白山社へ向かう南北方向の林道とその周辺に7カ所のトレンチを設定し、遺構の有無を確認した結果、縄文時代の集落跡が広がっていることがわかりました。竪穴住居、焼土遺構、陥穴や貯蔵穴とみられる多数の土坑を確認しました。その多くは4・5・7トレンチに集中しています。竪穴住居8棟は円形または楕円形で、最大のものは長軸6m以上です。また、長径0.2m程の河原石を直径0.7mの円形に組んだ石囲炉のある住居もあります。遺構の周辺からは多数の縄文土器や土偶などの土製品、石器、剥片が出土しました。出土した縄文土器深鉢の器形や渦巻文を施した取っ手などの特徴から、縄文時代中期(約5,000年前)のものとみられます。



白山社及び駒形根神社調査区配置図



5・7トレンチ遺構配置図



住居3の石囲炉



出土した縄文土器

平泉野遺跡(中川9、若井原194-115地点)の調査

(1) 中川9地点

調査地点は、平泉野台地の南東方向に張り出した最大の平場の北東縁辺部の山林です。中川・駒形・若井原の3つの字境のすぐ西側に約10m四方の小さい平場を確認したため、そこに8m四方のトレンチを、その西側に長さ約60m、幅2～3mのトレンチを東西方向に設定し、発掘調査を実施しました。

その結果、調査区東半で溝を確認しました。平場の縁辺を地形に沿って西から東に35m、そこから南に5m伸びたところで、林道の造成によって壊されていました。西端は、すぐ西側の自然の沢地形を避けて調査区外の南西方向に延びており、上幅は約0.8m、深さは約0.2m、断面は皿形です。年代や性格などの詳細は不明ですが、形状から古代以降の区画溝か道路側溝ではないかと思われます。遺構の性格を明確にするため、29年度も継続して調査を実施する予定です。



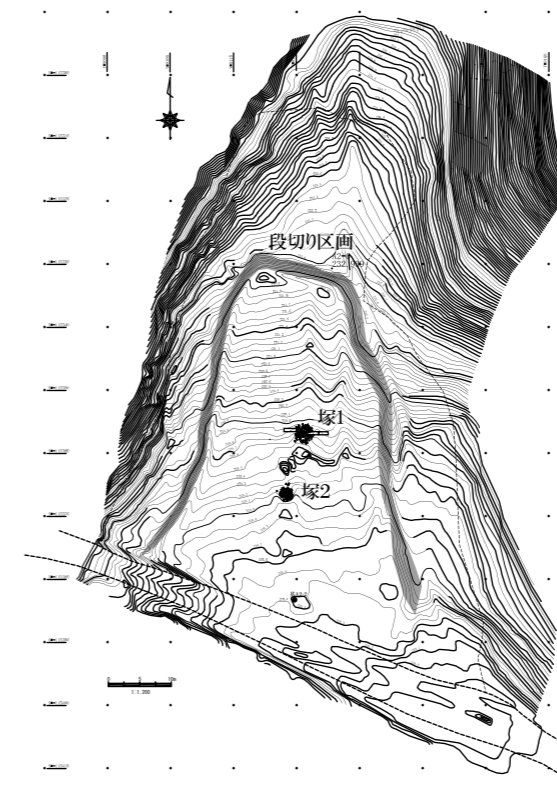
平泉野遺跡(中川9地点)遺構配置図

(2) 若井原194-115地点

調査地点は、駒形根神社の南側にある林道を約950m西に進んだ場所です。平泉野台地頂部の南側に「U」字形の段切り区画があります。区画は南に開口しており、その内側の中心付近には2基の塚があります。段切り区画は27年度に発掘調査を実施し、江戸時代(18世紀)以降の造成であることがわかっています。本年度は、2基の塚のうち、北側の塚1について調査しました。

概ね円形の塚1は直径約3m、高さ約0.4mで、表面に石が集中しています。中心を通るようにトレンチを設定し、断面を観察しました。塚は、地面を浅いレンズ状に掘り窪め、その上に積み土を3層積み重ねて構築されています。積み土の下の塚中央に近い位置に、主体部とみられる直径約1.0m、深さ約0.2mの円形の掘り込みを確認しました。

遺物は出土しませんでした。積み土と主体部の土を対象に自然科学分析を行いました。その結果、人や動物を埋葬した痕跡は確認できず、積み土からは炭化した稲の籾殻が微量検出されました。また、放射性炭素年代測定(AMS法)で、室町時代(16世紀)以降の構築であることがわかりました。



平泉野遺跡(若井原194-115地点)調査区配置図



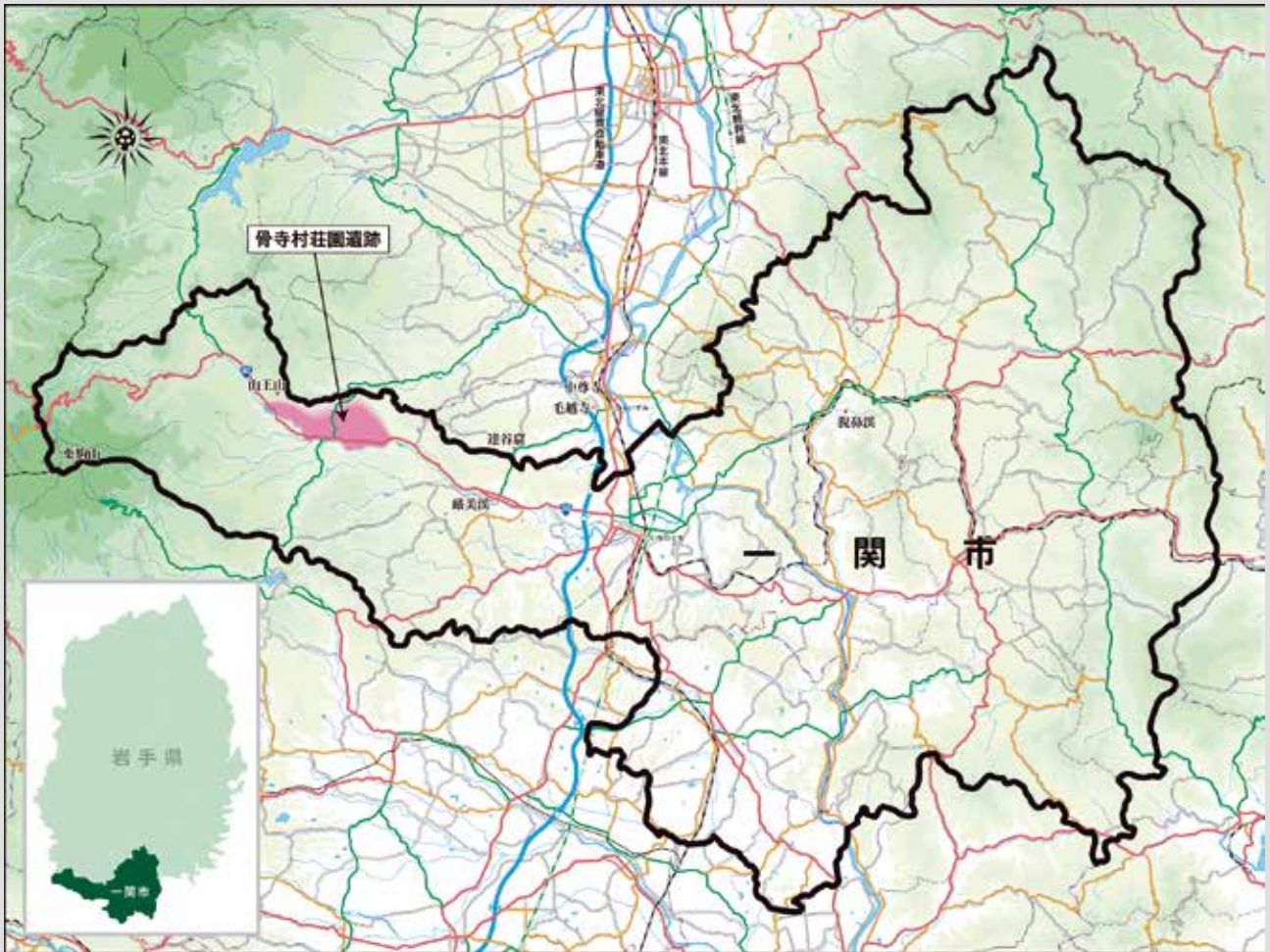
塚1全景



塚1断面



骨寺村荘園遺跡指定範囲図



骨寺村莊園遺跡位置図

国指定史跡 骨寺村莊園遺跡
平成28年度調査概要

【編集・発行】 一関市教育委員会
岩手県一関市竹山町7-2

【印刷】 川嶋印刷株式会社
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21

平成29年3月